

子ども・青年の発達と教育

今こそ、保護者・教職員が深く、豊かに
学び、子ども・青年の成長と発達に連動
させよう！

飛田 登美夫

一 はじめに

今年度の参加者は例年より遙かに多く、五十名を越える参加があった。例年の小・中・高・大の教職員と保護者の方々に加え保育関係の皆さんが多数参加してくれました。始めに共同研究者の富田充保さんから、ここ数年継続してきた四つの検討課題が提起された。①福祉的な視点を含んで実践を展開する。②自分の人生、今後の社会に対する根源的な問いを大切にすること。③基本的な学力の基礎の形成や定着を図る際に、子どもたちとの関係と切り離さず取り組む。④教育政策や行政の動きを批判的にとらえる。加えて、最近求められる問題として、乳幼児期から青年期までを繋ぐ長期的スパンで学ぶ必要性。学力、

学力と追い求められるが、子ども・青年を取り巻く社会的状況（青年の悩み・非正規労働者等）を直視せず、立て軸に繋げるだけの子育てや学力追求で良いものか。終わりのない競争で平均点争い。しかも、学力の内実の検討も希薄である。そのような状況の中でも当分科会では丁寧な検討と分析をして来たので、一層継続したいと指摘された。

二 『個の発達と集団づくり』

豊富町立豊富中学校の澤英樹さんから「個の発達と集団

づくり」の報告がされた。

【一】中学校入学までの子ども達の状況や育ちについて。

小学校6年になり、色々な事が毎日起こり、卒業式も感謝の気持ちや充実感の笑顔で向かえず、保護者や教育関係者に不安を抱かせたままの中学校入学だった。いじめ、仲間外し暴力、破壊行為など。しかし、事実関係が曖昧で「誰かのせい」でぐり抜け「大切なこと」を考えたり、仲間や大人との信頼関係を構築出来ずにいた。そこで、中学校として出来る事は何か・と模索し、2月に5教科の乗り入れ授業を行った。子ども達の実態を実際に触れ合って把握することと、入学前に何か良い

ところを見つけ、そこから育てる糸口を探りたい。

【一】指導方針として。(全学年1学級)

〈全校的視点から。ほめられる面や評価出来る面を全職員で創っていく事を根幹にして〉集団における人間関係づくり。集団における互いの関係の深化。自己理解の深化、可能性に挑戦する。前向きに声かけ、連携、民主的な話し合い、自治の力。視野を広げ、多面的で多角的な見方や考えから、正しい判断をして行動。

〈澤学級の視点から〉・生徒と接する時間を重視し、頑張る姿を複数の教師で把握し、毎日プラス評価出来るようにする。各活動や様々な事例から「大切なことは何か」を考えさせる。個々の「育ちそびれ」を全職員の協力を得ながら、じっくり育てる・努力したことで、充実感や達成感を得る体験をたくさん出来るように仕掛けを工夫し、自信を持たせる。

【三】学級の実態。在籍数30名。片親8名。父子家庭2名

班長会を組織出来る保障がないので三役会が学活提案すること。汚い言葉であるが本音が出せる。①学習。オンタイムや学習意欲はあるが私語も多い。けれども注意出来る生徒も増えている。学習内容の理解度や学習目的のおさえ方に個人差が大きく、全体と個別の支援・指導が必要である。②家庭学習。テストに向けて計画表に記録しながら発的動機づけに努力出来る生徒。自主的に取り組む生徒と宿題だけをする生徒・全く取り

組めない生徒の3つに分類される。③生活(基本的生活習慣)ほとんどの生徒が「早寝・早起き・朝ご飯」を意識して生活している。睡眠時間が少ない生徒が数名。④人との関わり。会話は盛んになってきている。男子の積極性が女子の認めにつながり、男女間の溝が無くなってきた。互いの良さを認め合うことが出来てきている。⑤特別活動。個々の考えを互いに尊重しようとしているが、関連づけて補足するなど深まりに乏しい傾向もある。自分の考えをしつかり人へ伝える表現力の育成が課題。⑥学級係活動(当番清掃等)自らよく働く生徒と、声かけが必要な生徒がいる。給食当番の準備は積極的だが、片付けに課題がある。

【四】前進と後退を繰り返しながら成長。

中学生になり1年8ヶ月。毎日色々なことがある。しかし、あるからこそ、個々が様々な思いを抱き、仲間と語り、ぶつかりながら、努力すること・認められること・温かい目を感じ、向上心や熱い思いが、相互の認め合いや信頼し合う姿となり笑顔が増えたと言われた。ただ、これらの指導過程でいつも「このままでいいのか!」と自問自答の繰り返しであった。子ども達の「育ちそびれ」に対し「心を耕し・心を育てる」ことを重視すると、「させる指導・できる指導」が求められているように強く感じる中「したいと思う指導・頑張ろうと思える支援」が「育ち」につながると確信するこの頃と言われた。更に、こ

れまでの子ども達との取り組み「友達関係・生活・行事・勉強・部活・進級への決意・文化祭に向けての話し合い」などを克明に報告され、学級づくりを通して教育の営みの核心を確認することが出来ました。

二三 『心とからだの開放をめざした表現活動』

伊達市立稀府（まれつぶ）小学校の佐茂厚美さん。本分科会で3年連続の報告を頂いた。十月の学芸会のスローガン【心にとどけよう。どうどうしたすがたを！】

始めに二十分程のビデオを見せて頂いた。これが小学校1・2年生の表現。参加者から唸りと感嘆の声。子ども達の学芸会の目標には「じぶんのポーズをきめる時、となりの人を見てしまったから、こんどからやめようと思えます」「はずかしがらないで、どうどうと言う。大きな声を出してはつきりと言う」「わたしには、できたことが二つあります。一つ目は、ソロの時、もつと大きな声でうたうことです。二つ目は、サンゴのポーズの時、いつも同じようなのばかりだから、つぎこそち

がうひょうげんをしたいです」「れんしゅうでは人と目を合わせてしまうことが多かったけれど、つぎからは目を合わせないようにしたいです。ポーズが人と同じになつてしまうことも多いけれど、ちがうようにしたいです」「わたしは、うたのソロがあります。そのうたはかなしいたです。ゆっくり歩きながら、歩くスピードに合わせてうたいたいです」「ぐん読の雨の『め』をのばさないように言う」佐茂さんは『物語を子ども達にイメージをめぐらせ、それから学芸会の発表をつくる』『高学年の動きを見ていて、あこがれを持っている。低学年の内に細やかな動きを培う大切さを考える』と指摘された。学芸会の感想には「わたしの目ひょうは、ポーズをちがうようにすることでした。ふるえてつらかったです。二つ目は、ソロの時、もうすこし、まひろちゃんのように大きな声でうたいたかったです。三つ目は、うなぎの時、さゆちゃんのかたをもうすこしつかめばよかったですと思いました。家の人には、『がんばったね』と言われました。うれしかったです」「ぼくは、うたの気もちをもつて、目をきめてうたうとめあてに書きました。スイミーでは、おきやくさんがたくさんいたけど、大きな声でうたいました。だから、ぼくの声は、おきやくさんにとどいたとおもいます。じいじを見つけたので、ぼくはじいじを見てうたいました。ぼ

くは、じぶんの立てためあてをまもれたと思います」「ぼくががんばりたかったことは、みんなが止まってもぼくは言うことで、それを目ひようにしました。本ばんではうまくできたので、よかったです。おわたたあと家にかえてママに聞いてみたら、『よかったけど、おおひばりのさいごのところ、あくびしてたね』と言われました。ぼくは、『よく見ていたね。』と、おどろいて言いました。」「二つ目の目ひようは、『どっちの学校いい学校』のことでした。一年生のかりんさんといっしょにせりふを言いました。それは、『先生もいっしょにここにこ』というせりふでした。じぶんの中では、今ならもつと大きな声を出せると思っています。学ばい会は、今からまたやりたいです。学ばい会がおわたたあととおかあさんに、『すごくじょうずで、いろいろな人にじょうずでしたねって言われたよ』と言われました。わたしはうれしくてうれしくてたまりませんでした」

更に、谷川俊太郎を教材にした「詩を楽しむ」授業の報告を受けました。本当に表題に迫る日々の実践報告でした。討論では、『低学年から、考える・自分の言葉・振る舞いそして、自分の立ち位置などの組み立てが勉強になりました』『心とからだを育てるという視点の大切さを強く実感した』共同研究者の床井良信さんは「子ども達の動きの『ほぐし』の如実さなど

感嘆を受けます」と評価された。

四 「インターンシップで見えた『働く』と『学ぶ』の間にあるもの」

専門学校教員の登山慎一さんの報告。

登山さんは以下の四つの観点から報告された。

【一】学生が直面している困難としては、メンバースキップ型進路での就職難と、ジョブ型進路での早期離職である。その背景として①「まじめさ」や「コツコツと積み重ねる努力」が評価されにくい（会社にも問題が？）②最初の印象を払拭できない③先輩、上司の言っていることがわからない④先輩、上司に言いたいことが伝わらないことを指摘された。

【二】専門学校教員としてできることは、「武装」して送り出したい。中味として①早期離職の大きな要因は、「他者意識」不足がある。（ただし、これは、若者だけではなく若者を取り巻く社会全体にも言えること）更に『専門学校は若者を武装させることはできてでも社会を変革することはできない』と捉えている。②「善意の不理解者」を演じること。③安易に教えないこと。④わからないことを「わからない」と言わせる。できな

いことを「できない」と言わせること。⑤学力を向上させても、離職者の問題は解決しないこと等を指摘された。

【三】専門学校ではできないことなので、『抵抗のための』『適応』（したたかさ）を育てたいとする。①「人とつながる力」を育てる。抽象的な能力論ではなく、これは経験や積み重ねで得られるものではないか。学校教育だけでなく、家庭や地域でも、子ども・若者がより多くの人と接点を持つことができるような環境づくりをするべき。②「相手に伝える努力」をする経験。「自分が相手に伝えることは、相手に伝わらない」「自分が自分に伝えようとしていることは、自分には伝わっていない」という前提で、対話する姿勢を身につける。③愚痴をこぼせる仲間づくりを促す。「一つ上の先輩」がいなくて珍しくないので現代の若者を取り巻く職場環境。同じ職場に「愚痴をこぼせる仲間」がいないのであれば、同窓生や学校の先生など、愚痴をこぼせる仲間を持てるように支援する。

【四】我々がやるべきこととしては、教育の「積分は」は、数学の積分よりも簡単として。①各学校種の取り組みと意図を知ると共に、抱える困難も把握する。②（まず先生が）様々な価値観や情報を含むヒト・モノ・コトに出会う。③自分（たち）のできることを実行し取り組みを共有する。④できないことを共有して、他者との依存関係を作る。⑤『選択』という武器を利用する。例えば、離職者が多い企業には生徒を送らない等。

又、資料から・就職しても40%〜50%は離職していること。（離職の良し悪しは別）高校を卒業した者のうち、半数以上が何らかの挫折を経験し、なおかつそこから再チャレンジしにくいのが今の若者を取り巻く状況と結ばれました。

討論では、「生きていく力を出させてやらないと痛感させる素敵なレポート」・「わからない」と言える環境づくりや学び合いをつくる必要性や重要性を痛感した。「こいつ！何とかしてやりたい！」と思わせる報告を受けた。等が確認された。登山さんからは、一年生四十二名で四十一名が辞めていない。学級通信の活用も有効と話された。

五 『つねげる・つながる・みんな育てる』

前稚内東小。現豊富小学校教員 末村哉子さんと
稚内市教育相談所スクールソーシャルワーカー

熱海早苗さんの報告。

【一】はじめに。東小にスクールソーシャルワーカーとして配置され、子どもを取り巻く環境がより良いものになるよう力合

わせをしてきた。学校の中だけでは、子どもの真の姿は把握出来ない。学校の限界を良い意味でカバーしたい。そこに該当する児童に対しては、関係機関（委員会・子ども課・保育所・幼稚園・保健福祉センターなど）とつながったり、子育て支援ネットワークを立ち上げ、地域の様々な役割を担った方々の力を借りながら見守りを進めてきた。

【二】父子家庭のA子。小さい頃父母離婚。父親の祖母宅から通学。近くの学校は父親の出身校（子ども時代に良い思い出がなく東小の校区外通学）。A子は人なつこく、「甘えられる」人には、怒られるまで甘える。それ以上に、自分に興味を引こうとして、たびたびトラブルを起こす。父親が優しいときは、その甘えが増幅し、父親の怒りにどうすべきか学校で作戦を練り対応していた。

【三】「お父さんとながれない！」。父子二人暮らし。家に電話もなく一人でいる寂しさ。父の携帯に連絡しても出ない。歯が痛くても耐えるしかない。無断欠席の日はSSWの先生と家に行き事情を聴き登校を促し、一緒に『7解決策』を考えた。宿題をしなかった時などは父に叱られ、勉強しないなら学校行くなどとも言われる。しかし、A子は学校が大好き。父の勤務先の名前もつかめない状況であったが、改善への方策を深めた。ただ、遠足に向けた父のお弁当は、愛情のこもった彩り豊かな手作り弁当であったことから、Aへの愛情はきちんとあること

が伺えた。

【四】A子を取り巻く支援の輪。①担任・学年・指導部・養育管理職・SSWの連携。担任を軸にしなが、担任が出来る部分を学校全体でカバーし情報も共有し見守る体制を取った。特に、SSWの先生が校内外の様々な方々との繋がりを探り繋げる役割を果たし大きな支援となった。②全教職員で共通の認識に立ち見守る体制を作る。③子育て支援ネットワークづくり④父親とつながる人との連携。父親の会社が判明。その社長ご夫妻がとても良い方で、学校とはつながっていることは知らせず父親の良き相談相手になってくれた。⑤関係機関との連携⑥祖父母との連携⑦地域の方々の見守り。公園で一人にいる時など、近所の若い母親が家に招いて面倒を見てくれる。一緒に交換日記をして支えてくれる。

【五】A子と父親の変化。強くたくましく成長しているA子。6年かけて変化してきた父親（学校に足を運ぶようになってきた。歯医者に連れて行った）。

【六】終わりに。今回の取り組みを通し、子ども達を取り巻く人々がつながり始めると家庭環境も変化し、子ども達の生活も温かいものに包まれると実感した。学校だけでなく関係機関や地域の方々とながり、みんなで見守っているという安心感は、学校現場に働く私達にも大きな支えになることを確信した。

六 『A君の夢と希望に寄り添う支援を

めざして』

〜発達援助の視点から〜

八雲高等学校の長野貴美子さんから「A君の夢と希望に 寄り添う支援を目指して」との報告がなされた。

【一】同校の状況。創立九十年の歴史ある高校。生徒が自分達の自己実現を目指し生活している。又、特別支援教育も熱心に取り組み入学者決定後、中・高の交流も行っている。

【二】A君について。一歳半に、言葉の発達遅れで函館療育センターで受診し通院を続ける。小五から不登校。アスペルガー症候群と統合失調症併合の疑いと観察される。

(中学校担任から) 中一。入学式と七月の研修旅行時出席。中二。クラスに友人ができ、登校日数もわずかに増えた。中三。担任も変わり、家庭訪問再開。夏休み明けから高校受験を考え登校が増えた。しかし、受験ストレスからか突然脱力し検査入院した。「自閉症」とも診断される。

【三】本人と周囲の温かい支援。入学式翌日の上級生との対面式が本人に強い苦痛となった。「死ぬほどの地獄のような時間

だった」と振り返る。担任は「無理しないで保健室で休もうか」と伝えたが「大丈夫」と言ってしまったと後悔している。今後の方向として。A君と学校関係者(特別支援委員会)として。夜七時から一時間程登校要請(母の協力を仰ぎ車で一緒に来校)。時間をかけ、本人の願いを聞き取り、今後の方向を検討した。集団には入れないが、夜の校に自信を見せた。自分の自立のために「NPO法人就労継続支援事業所八雲シンフォニー」の支援を求める。そこで作業し労賃を得る体験を希望。パソコン操作に取り組み自分の名刺を作成できた。担任・長野先生や周囲の人々の名刺も作成し感謝の言葉に、はにかみと嬉しさを話す。八雲シンに週二回通所し少しの労賃も得る。更に、八雲シンの発起人でもあるC先生(ご夫婦とも関西で教職を務め退職後、八雲に移住)の大きな支援を受ける。A君の苦手な数学・英語等の学習も助け、生活面でも彼を追い詰めてはいけなさと考えながら石畳を踏むようにコミュニケーションを取られて来た。更に、『僕の方が元気をもらっている。最後の楽しみが出来た』とも言われている。長野さんは『今も彼と会うと、同じように見るが笑顔が違う。深読みかも知れないが、自信がついた顔に見える。同級生より社会に出るテンポは遅いかも知れないが、確実に歩を進めている。地域支援を受けながら、彼の人生を見守って行きたい』と報告を結ばれた。

七 『子ども・青年の発達と読書活動』

花川小学校の本岡育美さんから、『子ども・青年の読書活動』との報告がなされた。

報告のねらいとして。「子ども・青年期における成長・発達は人間形成の土台を築き上げる大切なもの。この時期にこそ読書活動が多くの効果をもたらすと信じ、教育現場の様々な場面で本を活用している」と提起された。

【一】朝自習は全て朝読書。週の月・木・金（水は計算の日）職員朝会を終え、教室に行く立ち歩きもなく、静かに読書をしています。担任も子ども達と本の感想を共有出来るように児童書。すると「先生は今、何読んでいるの?」「読み終わったら貸して下さい」などの交流が深まる。学級では「隙間の時間」にほとんどの児童が読書をしている。

【二】学級の〈図書係〉を活かした学級文庫。学校は市民図書館と連携を図り、常に全学級に本が用意されている。学級の図書係のねらいは3つ。①絵本や小説、シリーズ作品、図鑑など様々な分野の本の取り入れ。②学校行事や季節に合った本があれば積極的に借りる。③時にはみんなのリクエストも聞いて本

を選ぶ。子ども達は、翌週どのような本が入るか楽しみむようになっている。後期の学級係希望では、図書係に人気が殺到した。図書係を魅力的と捉えている。

【三】〈読書カード〉の作成。全校で読書活動推進の目的で読書カードを作成している。子ども達の状況に応じて、励まし方も工夫され(例えば体育会系の男子や読書習慣のない児童にも)配慮して。そのような取り組みから「〇〇ちゃん、今、読書カード何枚目」「△△さんは何読んでるの?あ、これ、うちも読んだ!」と子ども同士で読書カードを確認し合い、読書の共有場面が増えて来ている。昨今の教育現場は学力向上が声高に叫ばれています。が、せめて学校にいる時ほど少しの時間でも読書への意義を大きく捉えていると言われた。

【四】子どもたちの変化。子ども達自らが(担任の指示なしに)学級新聞の作成へ。自発的な構成でその中に『おすすめ本コーナー』があり担任として何より嬉しかったと話された。確実に子ども達の学校生活の大切な一コマに位置づいたと。

【五】担任自らが体を通して。子どもを読書好きにするには担任が読書好き。自ら読書の時間を求め姿で伝えたいと。教頭先生やPTAのお母さん方が読み聞かせの実践もされていると報告された。

八 『0歳児のあそび』

札幌つくしの共同保育所の守屋幸恵さんから『0歳児のあそび』の報告を頂いた。

保育所は0歳～5歳の67名で「目指す子ども像」の中でも『体を動かすことが大好きな子』を進めている。天気の良い日はできるだけ外に出て・・・「外でもハイハイさせるのですか?」と質問を受ける。安全に十分注意しながら子ども達の意欲を大切にしたいと取り組んでいる。子ども達の大好きなあそびとして①ホース入れ（物を掴んで穴に入れるという動作は、子ども手指の発達を促す最適な動作）②ハイハイ板（斜面になっている板を足の指を使って登る。筋力アップと足の指を使うことが目的）等を紹介され参加者が童心に還ると共に、子どものひたむきさに感じ入った報告でした。

九 『学校祭壁新聞コンクールにおける3年間の取り組み』

北広島西高校の大澤信哉さんからの報告を受けた。

北広島西高校では、学校祭で三部門「パフォーマンス」「展示」「壁新聞」での取り組みをしている。大澤さんは、壁新聞の指導（取り組み）を通し、先生自身が高校生と共に（気づき）と〈学習〉の重要性を確認された。

【一】学校祭での位置づけ。目的は「クラスづくり」を主眼に、クラス目標に達成感を持たせ「学校づくり」にまで運動させる。

【二】壁新聞コンクール。①内容。社会や学校での問題をテーマにして取材を行う。②取材を行い、必ず「取材用紙」を書く。③審査基準。取材に基づいた記事であること。記事の内容がしっかり伝わること。自分達の主張があること等。

【三】2012年壁新聞『児童虐待の実態』取材を通して。「家族政策・教育政策への財政支出の乏しさ」や「家族に依存する子どもの育ち」から、家族の生活状況が、そのまま子どもに影響を及ぼし、かつ次世代家族に伝わりやすいこと。虐待相談の中でも「ネグレクト」の割合が北海道（4～5割）や札幌市（6～7割）が突出して高いことを掴めた。「しつけ」と称してひどい暴力を受けた生徒（身体的虐待）、常に夫婦げんかを見せつけられ言葉による激しい非難を浴び続け傷ついた生徒（心理的虐待）食事や小遣いを満足に与えられず洗濯、学校の準備、病院に連れて行ってもらえなかった生徒（ネグレクト）

が存在する。

【四】2013年壁新聞「10代の心の問題を考える」取材を通して。「不登校・ひきこもり」の要因は「不安・無気力」によるものが最も多く、その引き金になるのは「人間関係↓勉強↓家庭」の順番である。そのような人が身近にいた場合「私はあなたを大事に思っている」という「受容」と「共感」のメッセージを送り続けることが大切。校内アンケートからは学校の存在意義そのものが？目の前の学習課題や将来のことから逃避したり回避行動に繋がる状況になりつつある。まとめの中で大澤さんは「学力だけでなく適応力や耐性の面でも進学校との大きな格差が存在することが分かり、改めて現在の受験体制が子ども達に与える影響の苛烈さを確認した。受験知識の注入に固執する教員や学校体制の不見識、無慈悲がいかにも生徒に身につけさせるべき「学力」とかけ離れているか、本校の職員には切実に感じてもらいたいと述べられた。

【五】2014年壁新聞「家族×親子関係を考える」取材を通して。生徒が必ず「理想の親子関係」について質問したところ、3つの関係機関の方々共通して「自分を大切にしない

がら、お互いを思いやれる関係」と答えられたことが生徒の心に響いたと言われた。

【六】生徒の感想から①「頑張れば頑張るほど成功した時の嬉

しさは大きい」②「協調性を特に学べたと思います」

③「団結力は大切なんだとわかったこと」④「協力は必ず力になる」⑤「文字通り汗水流して記事を作ってデザインを考えて、

インタビューにも行って作り上げた作品が表彰される瞬間は、確かに青春を感じさせるものでしたAY」

大澤さんの報告は、私達にマンネリ化した実践は避けなければいけないと警告された。

十 おわりに

今年は分科会参加者が例年より遙かに多く、保育園・育児園の方々も積極的に発言して頂き討議が分厚くなりました。レポート数も10本を越え報告内容も深く感動的でした。子どもたち・若者・青年にこのように暖かいエールを送られているたくさんさんの保護者と教職員。学びが自分への励ましになることを実感させられました。総括討論でも、「人が育つ・人間らしく育つ」ために、親、又は親の代わりになる人がいるか否か。子どもたちが成長するために長いスパンで捉える目と、横や縦との繋がりの大切さが指摘された。又、共同研究者の内島貞雄さん・床井良信さん・富田充保さんからは次のような提言も頂いた。

- ◎ 発達を支え合う仲間づくりを大きくしたい。
- ◎ N P O 組織をつくり、ひきこもり等への援助は全国的に始まっている。
- ◎ 生涯を通して、支援していく地域や環境を作ると共にそのネットワークを強めていきたい。
- ◎ 子ども・親の育ちのあり方が問われているが、子どもたちを丁寧に見て支えていく。基本的には子どもを信頼していきたい。
- ◎ 人が根源的な学びに支えられ、飛躍につながるためには、【しぶとさ】【しつこさ】が必要ではないか。
- ◎ 社会の【つけ】を親や教師にすり替えている状況が進行している。
- ◎ 【学校教育は捨てたもんじゃやない】といえる実践がある。
壁新聞、書道、身体表現など、一人ひとりが優れた文化に入り込むことで同調文化に負けない、自分なりの高まりや文化的遺産を使っている。加えて、学校文化の創造も大切な視点がある。